建て、長氏の所領三分の二を氏連に與へて宗家とし、三分の一を連之に分かつて支統とせんと謀つたが、連之は之を悅ばずして越後に去り、館を黑瀧邑に構へたので、時人黑瀧長と呼んだ。連之四代の孫與市景連、天正中上杉謙信に屬し、能登に侵入して長氏の害を爲した所以は、等しく長氏であるが、固より同根の枝葉でなかつたからである。

チヨウツラヨシ　長連愛　加賀藩の老臣長氏の第八代。連起の二男。寶曆十一年五月廿八日出生。通稱竹次郎・梅次郎・將之佐・九郎左衞門。天明五年八月廿四日兄九郎左衞門連穀歿したるを以て、翌年連起の嗣となり、寛政五年正月廿八日新知二千五百石（內五百石與力知）を賜ひ、十二年二月十九日家を襲ぎ、遺知三萬三千石（內二千石與力知）を受け、同年十二月廿八日從五位下甲斐守に叙任し、天保二年十月十三日七十一歲を以て卒。法號敬義齋、金澤開禪寺に葬られた。

チヨウツラヨシ　長連穀　通稱九郎左衞門。字は子耕、恒升はその號である。藩の老臣大隅守連起の子。能く詩文を屬し、書法に達した。寶曆十年六月朔生まれ、天明五年八月廿四日父に先だつて歿した。年廿六。法諡恭謙齋。

チヨウツラヨリ　長連賴　加賀藩の老臣長氏第二代。連龍の二男で、慶長九年十一月九日生まれた。通稱長松・左衞門二郎・左兵衞・安藝守・九郎左衞門。十六年兄好連子なくして歿したから、連賴は祖父連龍の嗣となり、元和五年その歿するに及んで四月廿日遺領鹿島半郡及び加能加恩の地凡べて三萬三千石を襲ぎ、內二千石を與力知とし、寛文十一年三月廿四日六十八歲を以て金澤に歿した。法名初め乾德院、後に讓德院に改め、鹿島郡田鶴濱東嶺寺に葬られた。連賴の晩年は家臣浦野孫右衞門の權を專らにするあつて、一家中に騷擾を生じ、爲に藩主の裁斷を受けるにすら至つた。→ウラノジケン　浦野事件。

チヨウトクジ　長德寺　金澤彦三町に在つて、眞宗東派に屬する。初め能美郡淸水に居たが、慶長十九年八月金澤鍛冶町に移り、明治三十五年更に今の地に轉じた。

チヨウトクジ　長德寺　鳳至郡輪島に在つて、眞宗東派に屬する。

チヨウトモツラ　長朝連　信連の嫡男。東鑑建長二年正月十六日の條に、將軍鶴岡社參の供奉人に長三郎左衞尉朝連、又四年八月十四日放生會參宮の供奉人にも同名がある。能登志徵に、朝連は長家系圖に信連の嗣子とするものであるが、三男ならば同系圖の行連に當るわけである。或は系圖の行連が朝連の誤で、本宗を嗣いだのは朝連以外の別人であるまいかと論じてゐる。しかし三郎は父信連の幼名であり、朝連の子の政連も初名は三郎であるから、その頃の通名で、三男を意味するものではなからう。

チヨウナホツラ　長尙連　加賀藩の老臣長氏第四代。長元連の嫡男で、寛文二年十月十一日生まれた。小字は猪之助・千松、後九郎左衞門。初諱時連。寛文七年長氏に浦野事件の起つた後、前田綱紀は元連に剃髮蟄居を命じ、尙連を世嗣たらしめた。是を以て十一年連賴の卒するに及び、十月十九日綱紀はその遺封三萬三千石（內二千石與力知）を襲がしめたが、廿二日更に江戸から命を傳へて、長氏の領地が他の藩臣と異なり、連龍以來鹿島半郡に集團するを以て之を藩に收め、代ふるに領內に散在する采地を與へた。但しこの新采地は既に改作法の施行せられた所で、實收入に於いて不利であつたから、別に尙連の弟竹之助連房に千石を與へられた。元祿六年時連が諱を尙連を改めたのは、菅家たる前田氏の臣として時字を忌むといふのが理由であつた。九年正月從五位下大隅守に叙任し、十六年九月十六日四十二歲を以て卒。法號天尙院、田鶴濱東嶺寺に葬られた。

チヨウナリツラ　長成連　加賀藩の老臣長氏第十一代。連弘の二男で、弘化元年十月廿二日生まれた。小字翁菊、後雅樂介・九郎左衞門・九郎。初諱連賢。明治元年五月兄連恭の後を襲ぎ、遺知三萬三千石（內二千石與力知）を受けたが、廢藩の變革に逢ひ、十二年九月二十日享年三十六を以て歿。法號誠恭院、野田山に葬られた。

チヨウニンビヤクシヨウ　町人百姓　藩政時代に、町方に居住するものが、郡方に於いて田地の高を獲得したものをいふ。この場合には、何町何屋某事何兵衞と稱せしめて、その高方に關する限り百姓の取扱を受けた。

チヨウノウマアラヒ　長の馬洗　加賀藩の老臣長家では、正月十八日仲間等が三疋の馬に跨つて馬洗の式を初め、一家中參着して之に列した。この日累代の軍器などを大廣間に飾つて、諸人の見ることを許した。

チヨウノシミヅ　長の淸水　加賀藩の老臣長家の表門前にあつた。長家の能州穴水に居た時、その邸內に淸水があつたが、後金澤に移るに及んで、かの淸水一夜に門前に涌出したのであると、北國巡杖記に書いて居る。その事の奇怪は姑く措き、長氏は穴水から金澤に轉じたものはない。

チヨウノブウヂ　長信氏　長家系圖に、九郎左衞門尉國連の二男左衞門信氏を鳳至郡櫛比庄仁岸の地頭としたとある。

チヨウノリツラ　長敎連　通稱左衞門尉。秀連の弟。甥氏連生害の後旗を擧げて穴水城を復し、長氏の本宗を繼いだ。長享二年加賀の一向一揆富樫政親を滅ぼし、餘威に乘じて能登を侵した。是より後能登も亦一時宗門の徒の跋扈橫行する所となり、敎連は穴水城に據つて防戰したが、遂に力竭きて戰死した。輪島崎天滿宮の棟札に、地頭左衞門尉長谷部敎連の建立した趣を記すものがあるが、その年號は不分明である。

チヨウハイ　朝拜　嫁又は奉公人をしてその生家に往きて宿泊休養せしめることを、方言に朝拜といふた。朝拜は參賀の義から起り、正月親許に歸省する意味に轉用せられ、後には時期を論ぜず一般に生家又は親戚にも宿泊するをいふことになつたのであらう。

チヨウハクサン　長白山　白山としら山（白山宮）とを區別して、漢樣に書くときに、一を長白山とし、他を小白山としたもので、富田景周に初り、詩人輩多く之を用ひた。

チヨウヒサツラ　長久連　→チヨウヨシツラ　長義連。

チヨウヒデツラ　長秀連　通稱石若丸・九郎左衞門。政連の子で、光連の後を受けた。秀連初め子なく、棚木左門氏之の子連之を養うたが、既にして男氏連を擧げたから、之をして嗣たらしめた。